

孫が見た「親父の背中」 ～今一度、命の尊さを考える～

私は、親父の顔を知らない。親父は、スポーツの怪我が原因で40歳の若さでこの世を去った。誠実に生きた親父であったことに間違いはない。

戦時中、親父と家族は中国大陸で軍務に服していた。肩書きは軍曹であった。日本軍の、日本兵の残虐な行為については、母親の口からも聞いていた。しかし、親父は近所の中国の方々と仲良く付き合っていた。鬼軍曹ではなかった。

兄弟姉妹5人で、親父の足跡を訪ねたことがあった。北京から列車で7時間。日本軍が残した建造物が残っていた。学校、駅、兵舎。案内してくれた中国人の老人がいた。少年の頃、親父に命を助けられたとの事。日本兵に拘束されているところを、我が家の雇い人だと釈放してもらったとのことであった。老人は日本語が理解できた。しかし、あえて日本語を口にするとはなかった。戦争の暗い過去を背負っていた。追憶は美化されるが、残忍な戦場の片隅にも一輪の花は咲いていた。

親父からは孫にあたる我が息子の仕事の一場面である。浦添市内の家庭を巡っている際の、ある老婆との出会い。会話の中で、親父と同郷であることが分かった。貧困にあえぐ戦後の混乱期に、親父からお金を借りたとのこと。借金に追われる中で、親父の一言が心の片隅に残っていた。「子供たちの出世払いでいいから」との言葉が添えられた借金であった。故郷を脱出、平穏な余生をおくる老婆から、当時の感謝の意を込めて孫の手に1万円の小遣いが手渡された。3世代を経て、孫の目に写し出された「親父の背中」であった。

医療の現場は、「なぜ・・・」と問うことのできない出来事で満たされている。「生」「老」「病」「死」。いずれも答えはみつからない。東日本大震災もまた事実であった。「なぜ・・・」とは問えない。多くの方々が、失われた命の中に、「縁」「絆」の重みを感じたに違いない。

山之口貌の素朴な詩、「喪のある景色」が思い浮かぶ。「うしろを振り向くと 親である。まえを見ると まえは子である・・・」。連綿とつづく命の連鎖の中に、授かった命の尊さを今一度かみしめてみたい。殺伐とした世相である。「乳児・幼児の虐待」「いじめ」、そして「自殺」。現代用語から、これらの文字が消えることを願って。

誰が名付けたのか、今日は「父の日」。